

就活と「三びきのこぶた」

平岡 祥孝

採用内定を得た学生と、これからも就職活動を継続していく学生と、二極化しはじめる。婚活や終活という言葉が一般化してきている

昨今、もはや就活は市民権を得た言葉だ。地元中小企業やB to Bと呼ばれる企業には採用余力がある。優良企業であつても一般的には知られていない企業が多数活動していることを、学生は再認識する必要がある。それゆえ、丁寧な企業研究や熱心な企業訪問に取り組んでいる未内定者には、採用の門戸が開いている。継続は力なり。就活に負けないで欲しい。正しい努力は決して裏切らないから。

周知のとおり、経済産業省は社会人基礎力を提唱している。それは一歩前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング)、チームで働く力(チームワーク)である。これらは職場や地域社会などで仕事を遂行していく上で重要となる基礎的能力と位置づけられている。だが、何ら目新しいものではない。一定の仕事経験を有している者に、仕事に求められる力は何かと問うならば、社会人基礎力とほぼ同じ能力が挙げられるであろう。

他方、文部科学省は学士力を提示している。これは大学卒業までに最低限身につけなければならぬ能力であり、知識・理解、汎用的技術、態度・志向性、総合的な学習経験と創

造的思考力だ。社会人基礎力と学士力を多少詳しく見ていくならば、意外にも共通点や類似点が多いことも事実である。

それゆえ、一介の私学教員である筆者としては、学士力を伸ばしていくことが社会人基礎力を養うことにつながり、結果的に就業への道が開かれていくことを、声を大にして言いたい。要するに、大学で勉学に励み、人間性・社会性を豊かにしていくという当然のことを実践して欲しい。厳選採用と言われれば言われるほど、「大いに学んでこそ大学」という原点を忘れてはならない。

いつもながらの筆者の独断と偏見であるが、就職活動とは、学校社会から職業社会に移行していくために渡らなければならない大河に橋を架けることだと思ふ。当然のことながら、河の幅には個人差があるだろう。また、橋の架け方も各自の方法と速度があるだろう。しかしながら、この渡河作戦には着実さと緻密さが求められる。ちょうど『三びきのこぶた』に登場する三番目のこぶたよろしく、汗水たらして煉瓦を積むようなものだ。楽をして簡便に建てた兄さんぶたの家は狼に難なく壊された。

大学がレジャーランドや愚者の楽園と化してしまうならば、地道な努力や熱心な勉強が

置き去りにされてしまう。残ったものは手抜き三昧と結果オーライ。だが、何のために大学に進学したのか。トロウ・モデルに従えばユニバーサル段階に達した、教育大衆化の時代であつても、勉学の精神を肝に銘じて、真摯な勉学の姿勢を貫き、勉学の喜びを体験してこそ、学士としてふさわしいのではないか。それは時代錯誤ではなく、不変の真理だ。

いつも一夜漬けて見直すこともせずに、誤字脱字だらけの粗雑な答案やレポートを書いている学生が、応募書類やエントリーシート、あるいは作文を書き上げることは、至難の技。サボリ癖のついたゼミナール欠席常習犯が集団面接に際して、他応募学生の発言を踏まえ自らの意見を述べることは、なかなか困難。日常的に新聞を読まない、教科書を購入することなく参考文献も手元に置かない学生ならば、読解力が劣るゆえ、資料を熟読玩味して企業研究することなど不可能。講義中に内職や居眠りをしたり、あるいは携帯電話を操作したりして、真剣かつ熱心に受講しない学生は説明会やセミナーに参加しても、集中力が欠如。あくびは、くれぐれも注意すること。大学を舐めることは大いなる過ち。就活に負けないためにも、大学での学びは何よりも大切。大学生活を通して小さな成功体験を積み上げていけば、生きる力は必ずや養われる。職業人となつても「あの時もつと勉強していたればよかった」と後悔することも、しばしば。青春時代は道に迷つても結構。だが勉強だけは忘れずに。

八ひらおか よしゆき・札幌大谷大学社会学部教授